

地元の高校生を核としたエリアマネジメントに関する考察

日本大学大学院生産工学研究科

学生会員 ○大森 真央

日本大学生産工学部

正会員 永村 景子

日本大学生産工学部

フェロー会員 五十畑 弘

1. 背景と目的

わが国では、少子高齢化に伴い、地方部での市町村の持続的な地域づくりが求められている。持続的な地域づくりを行う上で、重要な観点の1つとして当該地域の人々の暮らしや営みにより形づくられた原風景の保全がある。これまで地域で培ってきたコミュニティの手により、守り継がれることで、今後も地域の人々が思う原風景が当該地固有の環境として保たれる¹⁾。このような原風景は、平成16年より文化財保護法の一部改正により、文化的景観として保護の対象となっている²⁾。

健全なコミュニティの存在がなければ、上記のような地域の生活・文化により根付いた風景の保全が危ぶまれるのみならず、耕作放棄地や放置里山の増加など国土の荒廃をも引き起こす。本研究は、こうした課題に対応する人材として、出身地域(地方)に住民票だけを置いているような若者に着目する。今まで無意識に過ごしてきた地域の原風景への意識付けが重要であると考えられる。本稿では、「若者」を地元から転出しやすく、将来を考える時期である高校生までとし、「大人」を高校卒業した人と定義する。

幼少期から現在まで、風景に限らず地元について何も意識せずに日々を過ごしてきた若者たちは多くいる。このような、若者たちに改めて地域を知ってもらうことで、人材育成の一環として、地域活性化を試みるアクションリサーチを行い、持続的な地域づくりに向けたエリアマネジメントについて考察することが本研究の目的である。

2. 本稿の着眼点

(1) 景観把握モデルに基づく風景保全と人材の位置付け

篠原の景観把握モデルでは、景観現象を分析、計画・設計の立場からモデル化し、人の置かれる場所を視点と視点場として整理している³⁾。本研究ではこれを基に、対象場における人にも着目する(図-1)。

①風景を保全する人材は、篠原の景観把握モデルにもある視点場に存在する人である。②風景の一部として成り立つ人材は、対象場に存在する人であり、当該地域の人々の暮らしや営みにより形づくられた原風景を保全する上で、地域として成り立つために重要な人材である。①・②ともに、風景を意識しながら当該地域で過ごす人材もいれば、②の中でも風景を意識せずとも、当該地域の中で暮らすことで、風景に貢献している人材も存在する。

(2) PDCA サイクルに基づく本研究のプロセス整理

本研究はプロジェクトマネジメントの工程管理に使用されるPDCAサイクルに従ってアクションリサーチを展開し、考察を行う⁴⁾。図-2には、「若者」と「大人」によるプロジェクトの過程をPDCAサイクルに沿って整理した。1年ごとに1サイクルを回し、年々改善しつつサイクルが積みあがっていく。

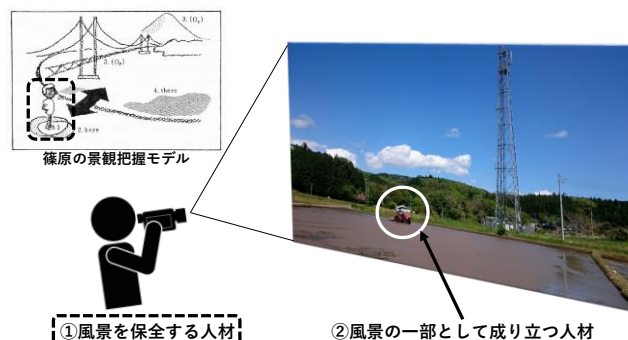


図-1 風景保全に必要な人材(筆者作成)

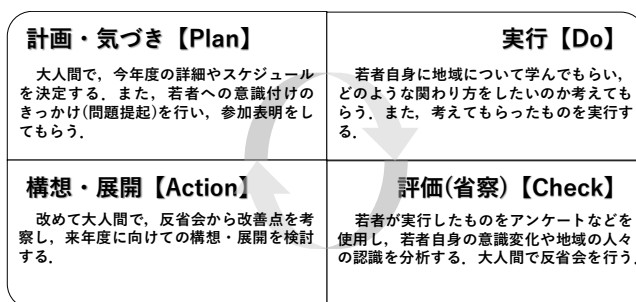


図-2 本研究のPDCAサイクル(筆者作成)

キーワード エリアマネジメント, 高校生, 地域環境保全, アクションリサーチ, 地域活性化

連絡先 〒275-8575 千葉県習志野市泉町1-2-1 日本大学生産工学部 TEL:047-474-2201 E-mail:cima17004@g.nihon-u.ac.jp

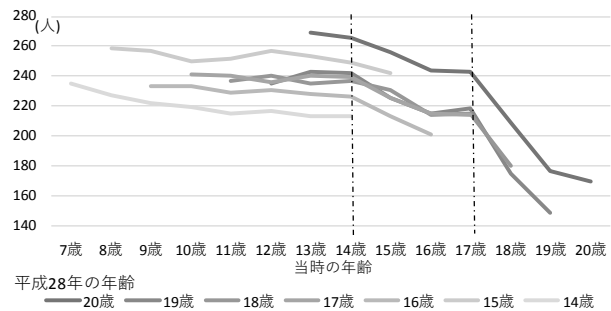


図-3 近年の高校生の人口推移(筆者作成)

3. 研究対象

(1) 鹿児島県伊佐市における少子高齢化の状況

鹿児島県伊佐市は、全国的に課題とされている少子高齢化が深刻となっている。本研究で対象としている高校生に着目して、人口の分析をおこなった。図-3 は今まで平成 26 年～29 年までの本プロジェクトに関わった生徒の年代を対象範囲とし、各年代の年齢別にグラフにしたものである。図-3 から、中学から高校への進学または就職、高校から大学への進学または就職をする際に多くの若者が伊佐市外へ転出していると考えられる。また、伊佐市内における地域内の人材確保が必要であることが考えられる。

(2) 鹿児島県立大川高等学校の概要

本研究では、鹿児島県伊佐市にある鹿児島県立大川高等学校の 1・2 年生の生徒(以下、大川高校生)を対象とする。大川高校は、伊佐市唯一の県立普通科の高校であり、市内在住者が多く在籍している。通学手段は、公共交通はバスのみであり、徒歩、自転車、バイク、家族の送迎の利用も多い。

4. ケーススタディ(事例)報告

(1) 地域活性化プロジェクト概要

本研究で行っている地域活性化プロジェクトは、大川高校生に地域の文化・歴史を知ってもらいつつ、地域で行われている活動に主体的に関わる機会を設け、地域に関心を持ってもらうことが目的である。

平成 26 年から行っている事業であり、今年度で 4 回目である。毎年継続して行ってきたことで、多くの高校生が関わっており、累計の参加者は年々増加している。また高校生だけでなく、高校生の取り組みを支援する主体は年々増加傾向にあり、本プロジェクトが伊佐市に浸透しつつあることがわかる。また高校側の大きな

表-1 プロジェクト工程(筆者作成)

PDCAサイクル	日程	内容
a) 計画・気づき [Plan]	6月4日	大人間の顔合わせ・打ち合わせ
	7月13日	出張模擬授業「未来の伊佐の風景」
	7月後半	参加表明
b) 実行 [Do]	8月17日	現地探索
	8月18日	高校生と企画会議
	8月19日	大人間の打ち合わせ
	～	高校生と全4回企画会議
	11月26日	「第56回もみじ祭り」当日
c) 評価(省察) [Check]	1月27日	大人反省会
d) 考察・展開 [Action]	1月28日	次年度に向けた会議



写真-1 大人間の打ち合わせ風景(筆者撮影)

変化は、教員によれば、高校卒業後の進路選択へのモチベーション・姿勢が変化したことである。一人一人が伊佐市へどのように役に立ちたいのかを考え、進路選択を行うようになった、との評価がなされている。

(2) 今年度(平成 29 年度)のプロジェクト

曾木の滝公園は、年間 30 万人の観光客が訪れる、市内屈指の観光地である。今年度は昨年度に続き、曾木の滝公園で行われている市内最大級の祭りであり、もみじの見頃を楽しむ「第 56 回もみじ祭り」のプロデュースを中心にプロジェクトを行った。PDCA サイクルを用いて、今年度の工程を整理した(表-1)。以下は、各工程について詳細を示す。

a) 計画・気づき [Plan]

昨年度の反省を活かし、体制・予算・日程・安全に焦点を置きながら大人間で、今年度のプロジェクト詳細を決定した(写真-1)。また、高校生を対象として行った出張模擬授業後に実施したアンケートから、『今まであった風景がもしなくなってしまうたら悲しい』や『今の風景を残していきたい』など今まで無意識だった風景を意識するきっかけとなったことがわかった。以上を行った上で、参加する生徒を募った。

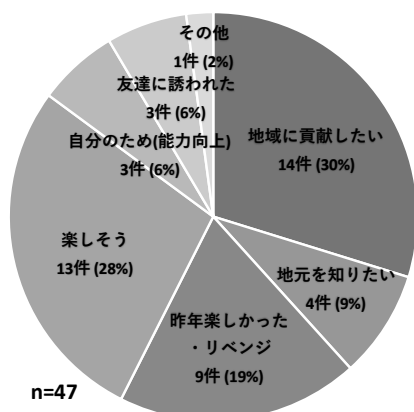


図-4 プロジェクトへの参加理由(筆者作成)

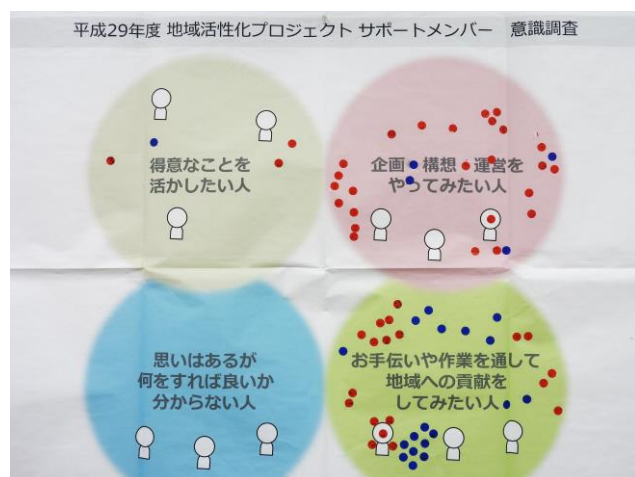


写真-2 参加への意識調査(筆者撮影)

b) 実行 [Do]

高校生に対しまず地域を知ってもらうために、もみじ祭りを行う曾木の滝公園を含めた周辺地域、曾木の滝分水路、曾木の滝第2発電所遺構、あったらし村の4ヶ所の現地探索を行った。その上で、どのような意識で本プロジェクトに参加したいのかを調査した。参加理由を自由記述してもらい、分類分けをした(図-4)。その結果、以前までに行ってきた本プロジェクトがきっかけとなり、参加表明をした人が過半数いたことが明らかになった。高校としても、本プロジェクトが根付き初めていることもわかった。また、本プロジェクトにどのような関わり方をしたいのか、取組姿勢を確認した(写真-2)。その結果、自主的に何かを行う意思のある高校生が多く見られた。

現地探索をもとに、もみじ祭りではどのようなことができるのか、高校生に企画を考えてもらった後、その企画が実現可能かどうか大人間での話し合いを行った。全4回の企画会議やクラウド上での情報共有、TV会議



写真-3 高校生との打ち合わせ風景(筆者撮影)

表-2 各班の祭り企画概要(筆者作成)

班名	企画	人数	協力した主体
ステージ班	ステージ発表の構成・司会進行	10人	観光協会
プロデュース班	祭り当日のパンフレット作成	11人	大学
アート(女子)班	インスタ映えするパネル作り	6人	
アート(男子)班	灯籠作り	16人	幼稚園
イベント班	スタンプラリー	12人	
Local Specialty班	米粉カップケーキ作成	10人	橋脇風月堂
エディター班	高校生の全体管理	2人(7人)	

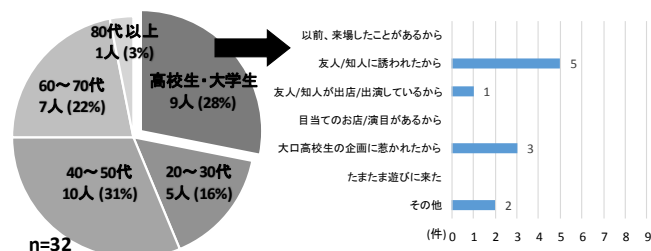


図-5 来場者の属性と来場理由(筆者作成)

を行いながら、プロジェクトを進めた(写真-3)。祭り当日、小雨は降っていたがすべて無事行うことができた(表-2)。

c) 評価(省察) [Check]

今年度の振り返りを大人間で行いつつ、もみじ祭り当日の来場者アンケートや高校生の振り返りアンケート(現在実施中)を用いて、評価(省察)を行う。

来場者アンケートは、もみじ祭りの当日に行った。小雨ということもあり、あまり回収率は良くなかった。図-5は、来場者の属性(年代)と来場理由(高校生・大学生のみ)である。本プロジェクトを行う前までは、高齢者の方が多く訪れる祭りであった。高校生が企画・運営していることから、大口高校の参加していない生徒や他の高校生が訪れているのではないかと考えられる。企画に惹かれて幼稚園児と一緒に親が訪れるようになったことが考えられる(表-2)。

d) 構想・展開 [Action]

原稿執筆時点では未実施のため、講演時に経過報告を行う。

(3) プロジェクト体制の考察

本プロジェクトを行う上で、図-6 のような体制図を作成した。第Ⅰ段階は、現在の体制図である。まず初めに、本プロジェクトを行う中で、重要な A.大口高校と B.活躍の場を提供する主体のつながりを持つことである。2つの主体をつなげ地域間での連携がスムーズに図れるよう、本プロジェクトをコーディネートしていくことが C.大学の役割である。また、高大連携（大学生による大口高校生のサポート）を行うことも C.大学の役割である。

第Ⅱ段階は、次のステップで目標としている体制図である。第Ⅰ段階の地域との連携を図れるようになったので、A.大口高校で持続的に展開していくことを重要視した。A.大口高校は県立高校のため、生徒の入れ替わりと教員の入れ替わりがある。そのため、高校内での段取りの引き継ぎがうまくいかなかったり、他の主体との関係が保てなくなったりする可能性がある。この問題を解消するために、毎年増えていく D.プロジェクト OB・OGの中で、今後も手伝いや後輩にアドバイスをする人材を募り、継続的な参加を促すことで、本プロジェクトの持続性が保たれると考えられる。

第Ⅲ段階は、本プロジェクトの目指す最終形である。C.大学のプロジェクトコーディネートが不在でも地域内で持続的に回っていくような体制（エリアマネジメント）となっている。D.プロジェクト OB・OGが地域に戻り、B.活躍の場を提供する主体として動くことで、A.大口高校と B.活躍の場を提供する主体の連携が途切れることなく続けることができると考えられる。

5. まとめ

本プロジェクトを通して、少しずつ高校生の意識が変化していることが明らかとなり、ただ無意識に地域の中で過ごす②風景の一部として成り立つ人材から、自分自身で考え、意識的に①風景を保全する人材や②風景の一部として成り立つ人材としての将来を考えるようになったことが見て取れる。

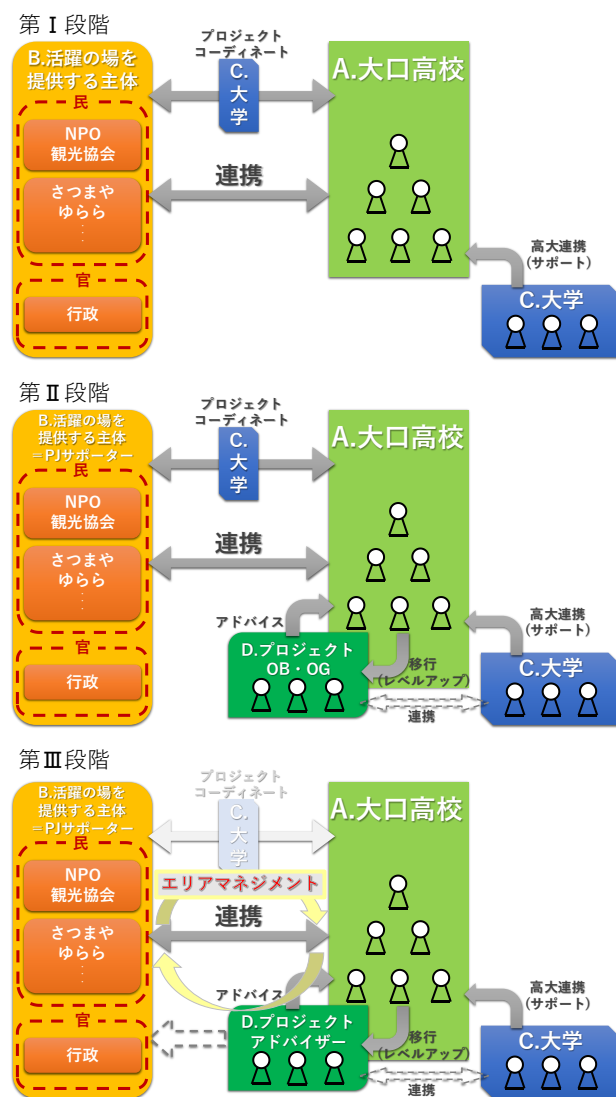


図-6 体制図 (筆者作成)

PDCA サイクルを持続的にを行い、プロジェクト体制を再構築しつつ、工程管理を行うことで徐々にエリアマネジメントを形成することができると考えられる。

参考文献

- 1) 藤井聡, 秀島栄三, 横松宗太: 土木と景観 風景のためのデザインとマネジメント, pp160-163, 学芸出版社, 2007.
- 2) 文化庁: 魅力ある風景を未来へ - 文化的景観の保護制度 -
- 3) 景観デザイン研究会: 景観用語辞典, pp30-35, 彰国社, 1998.
- 4) ISO-MS 研究会第4分科会: 図解 これは使えるプロジェクトマネジメント -ISO9000:2000 年版対応-, pp19-22, オーム社, 2000.